

## 謹んで新春のお慶びを申し上げます

旧年中は、皆様に大変お世話になりどうもありがとうございました。おかげさまで至誠学園の子ども達はのびのびすくすくと成長することができました。本年もどうぞ変わらぬご支援、ご教示を頂けますようお願い申し上げます。

現在 57 名の子ども達が暮らしています。振り返ると平成 27 年も様々な出来事がありました。やはり喜ばしいことや楽しかったことが、すぐに思い出されます。子ども達と職員の数だけ、ひとり一人が主人公のドラマがあったことでしょう。この一年も負けず劣らない素敵な経験、喜び、充実、豊かな出来事が皆さんのもとにありますようお願いしております。

### 『少年たちはかくもよく戦えり・・・子ども達の成長、可能性を信じて応援すること』

手が荒れてしまうことなど一切気にせず一心不乱に洗っても、繊維の奥に入り込んだ泥汚れは糸の色を変えてしまったのかと思われるほど、夏のグラウンドで染みついた汗と泥はしぶとい。明日までに真っ白いユニフォームにすることは、慣れたお姉さんたちにとっても決して容易なことではありません。そんなこと判っていても、できるだけ、誰よりもきれいで見栄えのするユニフォームで彼らを送り出したい、と Aさんは願い、額に汗をにじませて、さらに腕に力が入るのを意識したと聞いています。

7月末の東京都江戸っ子杯争奪野球大会。予選リーグ、決勝リーグ、途中荒天の為順延、そして決勝と、三日間連続の試合日程は、誰も予想していませんでした。連日 30℃を超える中での、まさに真夏の総力戦でした。総勢 12 名のチームは、小学生、中学生、男女混合の、控え選手の余裕など殆どないチーム。誰が欠けてもチームは試合に臨めません。中学生でズラッと粒を揃えたチームとは違い、でこぼこ感満載のチーム。わずかに野球経験のある中学三年生が、皆を引っ張り、とてもいい雰囲気チームが一つになっていました。ひとり一人が自分以外のメンバーを認めていたし、自分が認められていることが判っていたから、プレーに自信があふれていたのではないのでしょうか。人を信頼できることで新たな自分の可能性を生み出すことを感じました。応援側の顔ぶれも子ども達にプラスの力を与えていました。今は別のところで働く元職員が、何人も応援に駆け付けてくれて、後ろの方で静かにそっと見守ってくれていました。

何度も危ない局面はあったはずだし、体力的にも限界に近かったはずでしたが、終わってみれば、見事に優勝。真夏の太陽を受けて表彰式に臨む、日焼けと汗と砂埃で全身がグラウンドの色に近い選手の自信あふれる緊張気味の顔と、その笑顔に見えた白い歯のコントラストがとても印象に残っています。

今年、私にとって、もっとも印象的な子ども達の笑顔の一つです。

あの興奮から 4 か月。12 月のある夜、突然、担当者に付き添われた野球部の少年が訪ねてきました。スポーツは得意だけれど、学業の少し苦手な中学三年生の少年が、高校受験を併願受験（都立と私立の二本立て）で臨めることになった喜びを満面の笑みで表現しながらやってきました。他の同級生と同じように都立高校にも挑戦できることの喜び。「都立〇〇高校へ行きたい。」力強い声は、確実に入れる高校を勧めるべきだ、という大人の考える安全策などあざ笑うかのように、転ばぬ先の杖を先に見せて渡してしまう日常にハッとさせられる瞬間です。挑戦してみよう、頑張ってみよう、勝負はこれから。まだ、スタートラインに立ったに過ぎないのだから、安心せずに勉強しようと思破をかけます。将来への決意を語る彼の顔つきが、一瞬だけど、少年から青年のそれ変わったように感じました。

本当の春が、それぞれの春が、確実にこの子ども達のもとにやってくることを心より願っています。



至誠学園 施設長 石田芳朗  
職員、児童一同

至誠学園会議室で燦然と輝く三本の優勝旗(ぜひ、見に来てください！)